

## 巻 頭 言

# 技術開発の方向性と 開発テーマの絞り込みについて

技術開発部 部長 石田勝彦



「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった・・・」は川端康成の「雪国」冒頭の一節であるが、現在の技術開発が置かれている状況、即ち開発環境が時々刻々大きく変化する状況を喩える一節かも知れない。しかし更に言わせてもらえば、「トンネルを抜けるとそこからは線路がなかった」と言った方がもっと当たっているかもしれない。線路があればまだそのとうり走ればよい、しかし現在ではまさに‘雪の中自ら線路を敷設しながら’進んで行かなければならない、そんな状況に置かれているのである。

狙い違わぬ方向性、最速スピードとなるよう“開発リソースの投入”を行わなければならない。

開発の方向性と言うことからすれば、もちろん「環境対応、かけがえのない地球を守る」が最終的な方向のひとつとなる。また、当社の経営ビジョン「ものづくりの世界の発展に貢献し」があるが、これもまた基本的な方向性となる。しかしながら我々は企業活動を続けて行くためには所謂“飯の種”を造り出さなければならない。それが開発商品であり、しかもその開発が上記の方向と一致していなければ良しとならないのである。

当社が取り組んでいる「ドライ加工化」「コンパクト化」「高速化」「長寿命化」「抵抗低減」を指向した開発はまさにその方向性に一致していると言うことができる。

この先の開発テーマの絞り込みについて少し考えてみたい。限られたリソースからすると数あるテーマ候補から絞り込むということは重要課題である。更に開発が“効率的”に進むということも重要な点であり、当社の商品構造からすると“効率的”のためには開発テーマが「商品シナジー」「技術シナジー」性をもっているということが必要条件となる。更に「市場でのシナジー」性を持つということも効率的な販売活動を行うという点では欠かせない要件である。

経済性に優れているということは、お客様の側からしても、開発者の側からしても大変好ましいことである。従来の開発は、ややもすれば機能面を重視する傾向があったが、「開発品のコスト」は究極では省資源に繋がっており優先度・重要度の高い目標項目なのである。もっと突き詰めた発想をすれば“コストそのものが開発目標”といった開発があってもよいと考える。

1987年発行の「日本の技術」（：未来工学研究所発行 ～2015年技術予測）の中で2000年の予測事項を見てみると実現しているもの、いないものがあるが「経済性」という点が成否の鍵になっているようにも思える。

当社でも開発における原価の造り込みは実行してはいるものの、成果は必ずしも満足のいくものではなかった。しかし、昨今の自動車メーカーさんの高い原価目標を見ると、当社もこれに呼応して、あらゆる分野の開発について開発開始時から原価について高い目標値を掲げた開発テーマに取り組んでいきたい。それが、お客様と当社の両者にとって“嬉しさ”に繋がることであり、物づくりする者にとっての義務であると考えからである。